

西山五郎と 稲取

子供たちの健康と町を
悪疫から守った
最高学府出身の医学士

.....
東伊豆 ECO ツーリズム協議会



西山五郎略歴

旧姓名／加藤吉忠

明治二十三年十二月、「西山五郎」改姓名。

生年月日／元治元年四月二十五日

出生地／東京四谷荒木町

父／加藤宗高 母／より子の四男として出生

【学歴】

明治二十二年（二十五歳）

東京帝国大学医学部卒業。

山岡鉄舟の斡旋で静岡県令（静岡県知事旧称）・関口隆吉と会う。

【稲取開院〜逝去】

明治二十三年（二十六歳）

山岡鉄舟の弟子、下川津村見高の真乗寺にて病人の診察にあたる。

稲取村字入谷の栄昌院（えいしょういん）に於いて診療開始。

十二月八日・加藤吉忠を西山五郎と改名。

稲取村字根府の木六一〇番地に村より土地を与えられ村医となり
病棟建設に着手。

明治二十四年

上下道の必要を建議採用され工事開始。

明治二十五年（二十八歳）

三島大社宮司の娘「せい」と結婚。

明治三十年

青梅の馬鹿囃子を稲取村に伝える。

明治四十四年（四十七歳）

稲取水力発電会社設立役員となる。

大正十二年

学校医となる。

昭和七年四月十八日

妻「せい」死亡。

昭和十五年

西山五郎逝去、享年七十六才。



<昭和15年5月町立病院前にて・・・前列左／西山五郎先生>



◆西山五郎先生の生い立ち

元治元年（一八六四年）四月二十五日、江戸（現東京都）四谷荒木町で漢方医の父、加藤宗高・母より子の四男として生まれ、旧姓名を加藤吉忠と云う。長男は漢方医の跡をついだが、母は四男の吉忠に西洋医学を学ばせたく、帝大の医学部に入學させた。

このことは当時、近くにあつた山岡道場にお手伝い（今のパート）に通つていた母が山岡鉄舟から感化されたのかも知れない。

母・より子は鉄舟のお気に入り、能書家である鉄舟の書き物に印をよく押ししていたと云われる。又、学生時代から寺が好きで、旅をするとよく寺に泊まつていた。河津町見高の真乗寺にも泊まつたことがあるという。

山岡鉄太郎（山岡鉄舟）書簡

いよいよ御安寧大賀奉り候。然れば、過日は拝光、大慶の至りに御座候。さて、愚妻より御話申し上げ置き候趣にて、望生加藤吉忠と申す者、静岡病院へ罷り越し候につき、拝謁相願いたく、小生より申し上げくれ候様申し聞け候。御多事申中恐察に候えども。

四月十一日（明治二十一年）

山岡鉄太郎

関口君座下

造つて、小生病氣、度々御尋ねくだされ、ありがたく存じり奉り候。この頃は少々ずつ快方に御座候。御案事くだされまじく候。序でながら申し上げ置き候。



▲山岡鉄舟



▲全生庵

●注釈

明治九年（一八七六年）十月二十九日、「県立静岡病院」の盛大な開院式が静岡市屋形町で行われた。明治十五年七月になると県費削減のため県立は廃されて、安倍・有渡郡の郡立病院に変更された。経費は二郡の町村協議費と薬価などの収入と併せて県からの補助金で賄われたが、県からの補助金も明治十八年度から全廃になり、支出は年々増加したので、郡立以後の経営は楽ではなかったようである。

（本書簡は、封筒のあて名が「関口知事殿」となっていること、また、鉄舟が病氣であることから見て、明治二十一年のものと思われる。）

◆医学校の拡大と充実

明治九年（一八七六年）から全国で始まった医術開業試験（最初の医師免許制度）に対する予備教育を行っていたが、各医学校のレベルは千差万別であつたため、明治十五年（一八八二年）に医学校通則を設け、すべての医学校を甲・乙種に分け、甲種医学校は教員の三名以上が医学士（東大医学部卒業）であることを条件とした。当時の私立医学校はすべて甲種医学校であつた。

明治二十年（一八八七年）、政府は勅令で医学校の経費を県費でまかなうことを禁じたため、多くの県立医学校が廃校になり、残つたのは大阪府立、京都府立、愛知県立医学校と私立医学校となつた。これに先立ち文部省は官立の東京医学校の外に、全国に五大学区に高等中学校医学部を置いた。後に高等学校医学部となり、高等学校が帝国大学の予備校となつた後、官立医学専門学校となつた。

明治三十年（一八九七年）に二番目の帝国大学が京都に創立された。明治三十六年（一九〇三年）に専門学校令が布告されると、私立医学専門学校がはじめて文部省の管轄下に置かれた。さらに翌年から文部省指定校になると、医術開業試験を免除されて、卒業試験で免許を得る制度が発足した。最初に許可を得たのが東京慈恵医学専門学校である。

◆ 稲取に來た理由

加藤吉忠（西山五郎）は学生の頃、東京帝国大学医学部を卒業したら県の医者になる様、時の静岡県令（静岡県知事旧称）から言われていたが、明治二十一年に卒業すると県令が死亡しており、約束していた県の医者になることは実現しなかった。

そして、どういう風の吹き回しか伊豆の寒村、見高に來たのである。当時県下でも二三人しかいなかった帝大医学部出身の醫學士が、見高にどうして來たのか不思議であったが、このことについて真乗寺第十九代住職の田中佳哉和尚に、面白い話を聞くことができた。

加藤吉忠は東京谷中の全生庵に下宿、そこから帝大の医学部に通学していた。学校に通うかたわら、山岡鉄舟の道場に立ち寄り、鉄舟の子供にドイツ語を教えたり、自分も柔術など習っていた。

此の全生庵と言うのは、明治維新に西郷隆盛と勝海舟が江戸城無血開城の交渉の時、江戸と駿河を飛び廻り、その御膳立てをした山岡鉄舟が開祖した寺であり、全生庵の本山は越中の国泰寺である。なお鉄舟は剣と禅の修業をして、其の名は天下に知られていた。

西山五郎は誰に言われたのか「お前は話すことが下手で訥弁（とつべん）でもある。東京での開業は無理なので田舎にでもひっこめ」と。西山五郎は東京帝国大学医学部を卒業すると伊豆見高村の真乗寺に草鞋をぬいだ。その頃、真乗寺には第十七代佐藤百応和尚が住職として住んでいた。此の百応和尚は変わった経歴の持ち主で、元は享保元年、白隠禪師が住職をしていて、原の白隠と有名であった鶴林山松隠寺（駿東郡原町の臨濟宗寺院、弘安年間弘、天祥西堂の開山と伝えられている）の住職であったが、お経を読むことより博徒としての性格が強かったらしく、清水の次郎長の子分にもなっていたようだ。

この百応和尚が博徒で散々の目にあい、見高の真乗寺に逃げ込んで來たのである。次郎長と鉄舟の関係は、鉄舟が時の静岡県

令大迫貞清と一緒に次郎長に囚人を使って、富士の裾野を開墾するよう勧めたり、次郎長が明治十七年博徒の一斉検挙に遭って懲役七年、過料四百円に処せられ監獄にいた時、奔走して仮出獄させたりした後援者であった。西山五郎は東京から百応和尚を訪ねてきた。

以上の様な次郎長と鉄舟の関係を知らると、鉄舟開山の全生庵にいた西山五郎と、次郎長の子分であった百応和尚の関係がはつきりしてくるようである。百応和尚は明治二年真乗寺に來ている。

（昭和五十年十月十五日／真乗寺・田中佳哉和尚談）

見高・稲取に於ける医療活動

明治二十一・二年度の頃、帝大医学部を卒業したばかりの加藤吉忠青年が稲取村の隣村、見高村・金剛山真乗寺にやってきて村の病人の診療を始めた。

この頃、稲取村では田村又吉が村長になったばかりで、村の中は悪疫が流行して大変だった。川水を利用して飲料水を水道施設に改良する計画とか、病院を設置するため修学中の埴順司に、学資金の補助を出したりしていた。

帝大医学部卒業の加藤青年が見高に來たと聞いて、稲取村では黙っていた。村長・田村又吉は、議員・小林九平他数名を真乗寺にやって、加藤医師に稲取に來てもらうことにしたのである。そして病院を創立するまで入谷の田代山栄昌院（保田住職）にとりあえず落着いてもらい、開業の運びをみたのであった。なお加藤吉忠は明治二十三年十二月に西山五郎と改名している。



▲稲取入谷・田代山栄昌院

◆西山医院の開業

稲取村は西山五郎の招集請を実現させたが、病院建物はまだなく、とりあえず田代山栄昌院に落着いてもらい、診療を始めるとともに開業の準備をした。



村 会 議 書

明治二十三年度 特別費収支総計 決議書

第二部支出

第二款 金貳百五拾八円七拾銭 衛生費

内 譯

第三款 四百三拾貳円四銭七厘 土木費

弁償及報酬

内 譯

金百五拾円 飲料水改良補助費

右之通決議候也 賀茂郡稲取村々

明治二十三年十二月十一日 田村又吉

稲取村 明治廿五年 特別費収支総計 決議書

第四款 衛生費 千百円

一項 臨時費 六百円 西山医院創立費繰替金弁償

二項 医院新築費 五百円

五項 報酬賞与費 三拾円

六項 悪疫流行中関係人報酬及賞与

医学生徒補助費 八拾四円医学学生徒 塙順司 学資金補助

明治廿四年十二月廿六日提出 稲取村々長 田村又吉

右之通り決議候也 賀茂郡稲取村々会 鈴木常右衛門

明治廿四年十二月廿八日 小林九平 他七名

明治廿五年七月

西山五郎結婚するに付いて町では住まいを提供する

稲取村役場建物処分に付別紙第一号之通り本会提出候也

明治廿五年八月十日 賀茂郡稲取村々長 小林九平

第一号

稲取村役場建物ヲ本村西山医院居宅ニ無代価ヲ以テ譲渡スベキ事

賀茂郡稲取村字田町三百八拾三番地 稲取村役場建物

一瓦葺平屋 壹棟

此建坪 貳拾四坪

右決議候也

賀茂郡稲取村々会 鈴木常右衛門

他 九 名

村会の決議書に見る様に医者 の確保には、村も非常なる努力を
している。なおかつ伝染病予防のため、日本では二番目（外国技
術が取り入れられていない上水道施設では日本初）といわれる上
水道を設置して伝染病撲滅に努めた。

壹仟貳百円（千二百円）を投じて伝染病撲滅の一策として、木
管で水道工事を施工し、沼津川より東町に至る八百間を完成する。

明治二十五年 村会は特別費として伝染病流行に付き検疫予防費と
して一日六十円諮問認定す

明治二十八年 伝染病室建設 間口十二間、奥行二間半病室八間

明治三十四年 壹仟七百三十七円四十八銭にて下水道敷設、字松橋

（あざひのきばし）と赤水水源より引水

明治三十八年 土管にて桃野用水隧道完成

明治四十二年 経費壹万三千四百にて鉄管水道工事に着手する

◆村役場と避病院並びに石道

稲取村の役場は海岸の浦筋にあり、洋風の建物にて諸般の設備
整然たること、村役場としては稀に見る所なり。避病院亦其の南
方海岸の高地にあり、眺望絶佳にして萬事具足せる事、村立とし
ては他に類なき者と謂（いひ）べし。特に村道の敷石工事は、
繼續事業として次第に延長し、現在は海岸より入谷部落に向ひ、
二三の方面より進行中にて、其の仕様は概略三間幅乃至（ないし）
二間幅の村道を、両側は丸石にて敷詰め、中央四尺幅を伊豆石に
て畳み、坂道の勾配を緩くして車馬に便ならしめたり。既成のも
の約一里餘あり、数年の後は村内悉（ことごと）く石道となり、
雨中と雖（いけど）も木履（ぼくり）を穢（けが）すの憂なきに
至らんとす。誠に我国中東京の一部分を措きて未だ曾（かつ）て
他に聞かざる所なり、豈（あ）に感嘆せざるべけんや。

（新教育活模範 稲取美談より）明治四十年四月

◆西山先生逸話

稲取村では西山医師の招請が成功すると、待つて居たかの様に
施設を整えた。字根府の木に約一町歩の屋敷を与え、病棟建設費
及び療養施設費を補助、西山氏の技術發揮の準備をした。

西山医院ができた頃、稲取には向井に佐藤医者・東に鈴木医者
があつたが、帝大出の先生の評判を聞き、近隣の村々はもとより、
遠くは下田や伊豆諸島の島々から船で来院、先生に診てもらつて
往生するのが何よりとのことであつた。

ある日、腹痛の患者がかつぎ込まれた際、西山先生が診断、初
期腸捻転の疑いがあると判断して自転車の空気入れを取り寄せ、
肛門より送風治癒した事が伝わつて居た。昭和初期、その人が名
乗り出て事実であることが判つた。

また、下痢患者の便をなめて酸度を調べたという話しが伝わつ
ている。これは先生が目近くして物をじっくり観たことが、間
違つて伝えられたものではあるまいか…。

西山先生は一人で全科を診療した。外科・内科・眼科・産婦人科・
齒科まで一人でやつた。為に病院は何時でも満員であつた。後に
代診・書生・薬局に人を置き、兄を呼び寄せ会計を任せた。往診
時のカバン持ちは、水下「紺屋」のおばあさん、その前は「入谷
の湯」のおじいさんが持った事もあつた。また、先生は往診時、
馬に乗つて行くほど、馬好きであつた。

大正十二年一月、埴校医が死亡すると同年二月より校医となり、
長い間学校生徒の健康管理に努めた。衛生思想の欠如していた当
時、眼病であるトラコーマ患者が学童に非常に多く、この撲滅に
大変力を尽くした。

便と病人の顔を「ジューツ」見比べたり、子供の顔をしげしげ
と見ては親の名前をあてたりするのが、校医時代の先生の得意技
であつた。

◆西山医院

西山医院は学校に隣り、南東両面は村道に接し、東面に玄関あり、南面に病室あり、其の北に治療室あり、北裏に院長西山医学士の居宅あり、病室は四五十人を入れることに足れり。

患者常に充満し、聲價（せいけ）近郡に轟（とどろ）けり。特に嘆稱措（たんしょうた）く能（あた）はざるは西山先生赴任以來、十七ヶ年の今日に至る迄、学校衛生に盡瘁（じんすい）せられ、其の餘慶（よけい）一村の上に及ぼしたるの大なる事はれなり。即ち毎日午前午後共に二時間餘を生徒の健康診断の為に費され、未だ一日たり共缺（ともけつ）、勤せられし事なしと云ふ。嗚呼何たる熱心じや。我国幾千の校医中、西山先生の如き者他に幾人ありや、余末だ曾て之れを聞かざるなり。況（いは）んや先生には定俸あるにあらず、僅（わず）かに些少（せせう）の報酬を呈するのみなりと云ふをや。稲取村の今日ある、独り田村氏の功のみにあらず、学校には太田校長あり、其の他村老中の誰彼相共に一致協力の賜（たまもの）たるや論なしと雖（いえど）も、西山先生の徳亦偉なりとせざるべからず。余は後章に於て更に著（あらわ）す所あらんも、今茲（いまこ）に病院紹介の序（ついで）を以て、聊（いささ）か西山先生功德の一端を述べたるが、之れに因みて特筆大書すべき一個の美談あり。そは該村（がいそん）の故人、八代善次郎氏が一言の質問的中して、遂に此の良禰（ね）を永く該村に駐るに至らしめたる事なり。

八代氏曾（かつ）て西山氏に向つて曰く、
近來我大學を卒業せらる々諸學士往々愛國心を忘却するの嫌ひあるは如何なる故じやと、
西山氏曰く、

大學の卒業者が愛國心を忘却すとは何故じや。

八代氏曰く、

諸學士は自家の都合上大都會の居住を好み、郡村居住を嫌ふの風歴々たり、而（し）かも郡村は國家の根底にして、都會は唯だ

其の花たるならずや、根底たる郡村をすてる、花の都會にのみ心を寄する者多きは、果して愛國者なりと云ひ得る乎、特に醫師の如きは最も其の弊甚だしきを概嘆せざるを得ず、郡村は庸醫（やうい）のみにて足れりとする欺（か）、護國軍人の大部分は實に郡村子弟を以て充つるにあらずや、然るを単に自家の便宜の爲めに出生地たる郡村を嫌ふ者あらば、之れを愛國者と云ひ得るかど。
西山氏一言の辭（じ）なく、終（つい）に稲取村に止まるに至れりと。一古老の苦言能（よ）く有爲（いうい）の新學士を動かす豈に美談ならずや。

（新教育活模範 稲取美談より）明治四十年四月

◆西山先生の横顔

はげ少々「ドモリ」で無口でしたが、その人柄は表に出ないやさしさがあった。

相撲が好きであった、人の嫌がる癩病（らいびょう）患者とも相撲を取った。完治した癩病は伝染しない事を承知していたとも思われるができることでは無い。温かい心で接した先生の生活態度がしのばれる。

先生は病人を診るだけではなく、その行動範囲は広く、明治四十四年、町の有志と計って、入谷に稲取水力電気を設立した。村木善四朗・小林孝・八代萬太郎・鈴木松太郎諸氏と取締役として活躍している。

村に電灯をつけたのは県内で十一番目と早い、西山のラジオを聞くのに若者は、我先きにと家に入るため、順番を争ったと太田伊之助さんが話していた。

明治二十五年三島大社宮司の娘「せい」を、稲取入谷・山田耕造氏（土尻）の養子として、西山五郎は結婚した。二人は子福者で男五人・女四人の子供をもうけた。奉公人は西山の家を「お屋敷」と呼んでいて嫁入り前の娘さんが、何時も四人くらい行儀見習を

していた。最初の奉公人は大畑の為五郎さんのおばあさんだったとのこと。向井の高家の芳乃さんの話、先生のことを「オク」と呼んで座敷の方にはめったには入れなかったらしい。

病院にはいつも近くの菓子屋（旅館兼業）萬屋

からキャラメルを大箱で買って置き、子供が来ると親に知れぬように後ろに回って、子供の手の平に五ツ六ツと入れてやつたり、二月の節分になると奉公人の家族・親類を呼び、先生自から味噌を煮るときに使う一斗も入る大きな「イジャロ」（ざる）の中に、いっぱい菓子・豆・落花生、時には十銭銀貨などを入れて、「鬼ハ外」は伝わらず「福ハ内」ばかりで、拾う人々には「ブカー」「ブカー」と聞こえたそうである。鬼をもうじめない優しい心持ちの先生が偲ばれる。

大勢の人を招くことが好きで、庭のツツジが咲くと御馳走を作り学校の先生たちを招いた。村では何かあると、おばあさんたちが招待されることが比較的多くあり、おじいさんたちは何時も指をくわえていたらしい。先生はこのことを耳にして、新築祝いするとき、村のおじいさんたちを呼んで御馳走したことがある。ところが、時間が経って酔ってくると、所かまわず立ち小便をするは、ツバをはくは、仲間同士で「オレが」「オレが」と大声で威張り始めた。その品のなさに先生は驚いたり、呆れたりして一回で懲りた話が今でも語り継がれている。

稲取の夏祭りに演じられる「馬鹿囃子」は、稲取の若者に楽しみがないのを心配した先生が、明治三十年頃に青梅の方より「無音踊り」の職人を招いて、稲取の若い衆（田町・入谷・西町・東町）に指導したのが始まりである。



▲西山五郎の妻「せい」

農業、漁業等に従事していた若者は、仕事の都合で「馬鹿囃子」を覚えるのが困難であったが、大工、左官屋の職人が多かった田町区の若い衆は、熱心に練習して踊りを覚えた。その結果、現在まで演目が続いている。

何も娯楽のなかった当時、「馬鹿囃子」は町民に大変喜ばれた。当時、衣装一〇着、大太鼓、小太鼓、鐘、笛、お面（一〇面）指導料（宿泊）は現換算で三五〇〇万円以上で大変費用が掛かることとなった。

無口であった先生は「馬鹿囃子」が好きだったらしく自身も習うと、馬に乗って見高浜の若者に教えにいったらしい。見高浜の抹香屋で笛を吹いている先生の姿を見た人がいる。

馬鹿囃子は、あのお囃しを聞くだけで町中がうかれる程楽しい。一時、稲取の馬鹿囃子も途絶えたが、昭和三十年頃、金指茂幸・中沢正雄氏たちの友たち始め、中林さんたちの骨折りで復活させ、昭和四十一年、NHK TV「ふるさとの歌まつり」に出演し全国放送された。現在では稲取のお祭りには欠かせない演目となった。



▲現在の稲取夏祭りに欠かすことが出来ない演目「馬鹿囃子」

西山先生は盆栽・碁・俳句・マンドリンと趣味も幅広く温室まで作っていた。碁の相手は山田寛氏・正定寺の加藤窟外氏・前田要次郎氏等も相手になったと云う。

先生自慢の庭植木は、入谷の若い衆が大勢で植えた「モチの木」で、よく小鳥が飛んできて朝を知らせてくれた。手入れは、水下の車石のおじいさんでなければ機嫌が悪かったと云う。

先生は本が好きで沢山集めて大切にしていた。夏の土用には必ず虫干しをする。使用人に薬研で樟脳を粉にさせ、一人にページをパラパラめくりさせながら粉を振るのが年中行事の一つであった。

美食家の先生は牛の舌・ドジョウ鍋・冬のアンコウ鍋・夏の鰻の蒲焼き等、当時の稲取では珍しい食事で娘たちは驚きながら一緒に食べていた。酒は毎晩お銚子二本、小食であった。

帝大時代の同期生に、三浦金之助(侍医)・小川平太郎(鉄道大臣)等がいた。昭和七・八年頃、北海道で同窓会を行った時、二十五、六人の同窓生が六人になったといっていたことを、奉公人になったばかりの斎藤芳乃さんが聞いている。

昭和七年、妻「せい」死亡、男五人・女四人の子供をもうけたが、男は戦争に行き、三男慎吾氏は昭和十九年七月マリヤナ島で戦死四男英彦氏は昭和二十年六月二十日沖繩群島で戦死する。晩年はよく西町の弥平さんのおばあさんが身辺の世話をしていて「ハツ子」「ハツ子」と呼んでいた。昭和十五年十一月十七日。稲取町にとつて大きな仕事をしてくれた先生が亡くなった。



◆法名・明徳院心界智光居士 菩提寺の入谷・田代山栄昌院にねむる

父五郎儀病氣の処養生不叶十一月十七日午後一時二十分永眠致候
間此段御通知申上候
進て葬儀は十一月十九日午後一時より
当町采昌院に 於て 佛式に依り相営可申候

静岡県賀茂郡稲取町
嗣子 西山慎吾
親戚総代 富岡宗三
友人総代 福葉英司

▼西山五郎氏逝く

(静岡新聞) 昭和十五年十一月十八日掲載) 下田発

賀茂郡稲取町医師西山五郎氏(七七)は、今春来病氣加療中の処、十七日午後一時二十分遂に逝去した。氏は三浦謹之助博士と同窓で帝大医学部第一期卒業生で、氏は幸いに山岡鉄舟に私淑し、鉄舟の紹介で時の関口本県知事を訪れたのが縁で、本県へ足を踏み入れ、明治二十二年下川津町村見高の真乗寺に草鞋を脱いだのが縁となり、稲取町有志に是非にと乞われて稲取町に開業。当時は漢方医しかなかった奥伊豆に、西洋医学を収めた医師として最初の開業をして郡下は申すに及ばず、遠く伊豆七島に迄治療に出かけるような繁昌振り。

五十余年一日の如く賀茂郡民のに尽瘁された一方、往年の稲取村模範村の建設者田村又吉翁のよき相談相手として知られ、公共事業に尽くしたことはいとまがない。

なお稲取町町立病院の設立問題を聞くや、進んで建物、治療具一切を無料提供する等医療報国へ尽くす処少なくなかった。



▲采昌院に祀られる西山家御位牌 左から三枚目が西山五郎先生の位牌

◆西山五郎翁

（雑誌「黒船」連載深津山水楼著）

翁と愛馬・病床の西山翁

郷党の人物史を掲げて、筆者は数年前、二回ばかり、賀茂郡各町村の学校なんかで、あまねく講筵（こうえん）を聞いたことがある。その時、筆者は中川村の依田佐仁平翁や、稲取の田村又吉翁なんかは、少なくとも銅像ないしは頌徳碑に値する器才なのだから、郷党もこれに報いるべきだということを話した。するとこの二人は郷党も異存はないものだから、早晚頌徳碑が建つことになったのだが、稲取の西山五郎翁といえどもそれはまさしく銅像、頌徳碑に列すべき人材の一人だ。医道五十年の仁術（じんじゆつ）生活より足を洗って刀圭（とうけい）界を引退した翁は、その邸第の一部になっている病院の建物と、医療器械のすべてを三年間無償でもって稲取町へ提供した。その後で、宿痾（しやくあ）の神経痛がたかぶって、翁は葉包伏枕（やくほうふくちん）の人となった。S字形をした、長い廊下の角になった陽当たりの好い病室である。そこで静かに病軀（びよく）（びょうく）をベットに横たえていたのであるが、筆者をその枕辺へ通すと、どこまでも負けじ魂の翁だ。病勢（びやうせい）がかなり募（も）ってきて、手足の自由を失っているんだが、それでも翁はいったんベッドを蹴（こ）ってガバと半身をもたげ「どうぞそのまま」翁の顔には、正に半世紀という長い年代を貫いた仁術生活の労苦と、執拗（しやくごう）な神経痛からくる苦痛の表情が明らかに浮かんでいた。「この肖像画が大変よく描けていますね。先生の面影、風格がそのまま表現されていますよ。」初めに通された病室の隣座敷には、東賀醫師会長の稲葉英司国手（くんで）なぞが翁の医道五十年を記念して寄贈した肖像画が床の間に置いてあったので、そういうと翁も満足そうな笑いをむくいた。電気ストーブで病床は、ほっこりしている。枕元にはグラス瓶に入った薬がいくつも置いてある。部屋の隅に置かれたテーブルには、翁が読書家であることを表徴しているように、翁が得意とするドイツの医書なぞがいっぱい載っている。

筆者が訪ねると、翁は病軀（びよく）を忘れてるように、ベッドを乗り出しそうにして快く話してくれたのだが、勿論、この前に筆者が担当しているS社の用件でもって、初めて翁に逢って、明るい廊下でテーブルを囲んで話した時のようではない。こうして話しているおりも、なんとなく億劫（いんけつ）のように思えたので、筆者は他日を約して帰ったんだが、レントゲンの火傷という奴でその作用を失ってしまったのを、筆者は見逃すものではなかった。白っちゃけた斑点（はんてん）のできた翁の右指は屈折（くせつ）の自由が利かなくなっている。「ひどいすなあ」「こうなってしまうのです」翁は寂し（さび）そうに笑い返した。翁の仁術生活五十年は、その神経痛と、こうした恐ろしいレントゲンの火傷（かや）があがったのである。それが目に映ると、さも痛々（いたいた）しそう。なんで筆者はひとりでに胸（むね）に突（つ）かけてくるようなものを感じた。

翁の性格の一面は他日筆者が稿（こう）を起こすことにしている、もうずっと昔に籍（せき）を変った三坂の岡村国手（くんで）に酷似（こくせい）しているんだが、我が西山翁は古武士のような面影、風格（ふうりく）を持っているのである。それだものだから、翁は囲碁（いご）にも長じているんだが、その趣味は多くは男性的（だんせい）なんだし、翁の愛馬（あいば）に至（いた）ってはけだし趣味中の最たるものだ。

（「黒船」第十七巻五号 昭和十七年発行より）

【語句】講筵／講義

刀圭界／医学の世界：刀圭は薬を盛るさじのこと

邸第／屋敷

宿痾／持病

病軀／病身

葉英司／川津の医師

国手／医師のこと。

騎馬で往診

三舟の一人、山岡鉄舟は東京谷中に全生庵という寺院を建立した。西山翁の母堂は、鉄舟のその全生庵に身を寄せていたのである。それだものだから翁も鉄舟の内弟子になって帝大へはそこから通ったものだ。そして明治二十年に図抜けた成績で帝大を出た翁は、鉄舟の添え書きを持って静岡県の関口隆吉を訪ねた。その時代に帝大を出るというような学徒はいくらもなかった。それに鉄舟の添え書きを持って来たんだから、県令・関口もねんごろに翁を迎えたのだが、関口県令は静岡間の国道で自動車から落ちて、脚部に負傷したのが原因で間もなく鬼籍に入った。関口県令の夭折は、これから人生街道に力強く第一歩を踏み出そうとしていた翁をがっかりさせたには違いない。それから翁は遠州・牧ノ原の中条という人のところにも居たこともあるが、その後で翁は伊豆へ来て、下河津村の真乗寺にも居たことがある。顯僧、松嶺玄苗があった。後に鉄舟の全生庵へ走った玄苗は西山翁とは弟子仲間でも、とりわけ仲良しであった。翁が真乗寺へ入ったのも、そういう縁故で、玄苗が斡旋したものだ。後年、稲取町に招聘されて、翁が入谷の栄昌院で医院を開業すると、玄苗もそこで翁と同棲していたというんでも、二人の友義、友情が、こまやかだったことが知られる。

明治二十年頃であつてみれば、帝大出の国手なんていうのは翁をおいては静岡県下にはなかったものだが、その県下第一人者の翁、かつては鉄舟の全生庵でもって、結跏趺坐(けっかふさ)の生活をやってきた翁が、これも同じ臨濟宗の入谷の栄昌院で医業を開業することになったのも、それは一種の奇縁なんだし、あっぱれ天下の国手がこうした抹香臭い寺院なんかで、晴れの開業をしたというのは珍しい話なんだが、我が西山翁はそんなことには頓着(とんちやく)もない。

何にしろ、帝大出も秀才ではあり、ほかに医学士の肩書きを持った国手はなかったのだから、翁が名づけるところの「杏春堂医院(きしょうしゅんどういいん)」が素晴らしく繁盛をしたことは言う

までもない。

学生時代からの運動家、元来が武家育ちのガツチリとした体は、柔道も有段者なんだし、ジャンプもやれば、ランニングもやるし、そのランニングも怖ろしいスピードを持った健脚家なのだが、乗馬にかけても、実に名騎手の翁。どんな悍馬(かんば)でも、自由に乗りこなすだけの、長馬術に長じた翁は自身でも友人の世話で、士官学校の払い下げの馬を二頭ばかり買って飼育していたことがある。今は亡くなった、南豆の名医・師岡村建造国手になると、あくまでも徒歩主義で、患家の往診にはてくてくと歩いて行ったものだが、我が西山翁の場合は愛馬の駿馬に太い鞭を当てて、疾風のように思い様、駿馬を駆けさせて、患家めぐりをしたのだから、翁の扮装は、古武士が戦場へ望む時のように、それは颯爽たるものに違いなかった。

【語包】三舟／江戸城無血開城に尽力した幕末の三舟(勝海舟・山岡鉄舟・高橋泥舟)

鬼籍／過去帳

中条／中条景昭

真乗寺／河津町にある臨濟宗の寺。

国手／医術などで非常にすぐれた手腕を持つ人

奇縁／不思議な縁

悍馬／性質の荒々しい馬

結跏趺坐／両足を組あわせ足の甲をももの上にのせるすわり方。



「病名を聞いて何になる」

患者が病名を尋ねると翁はそう言つて、たしなめたものだが壮年時代、精力主義の翁は、その患者が危険だというような時は、患者から依頼されなくても、旦宸（たんしん）、自身からサツサと診察に出かけたものだ。ところが大患を冒されてからの翁は全身に活動力が漲（みなぎ）つていた若い頃のものではない。それだものだから、伶俐（れいり）な遠隔地の患者たちはいとも豊かな翁の趣味性を利用することを考へついたのである。下河津あたりの患者では、どこからともなく、名馬を見つけ出してきて、よく翁を迎えに行つたものだ。名騎手の翁にはそれが、悍馬（かんば）か、名馬かは、患者が持つてきて、その玄関先に繋いである奴を、病室の窓越しにチラッと見ればすぐにわかつた。それが名馬だと翁の愛馬心は一つ返事で、ヒラリとその馬に跨（またぐ）つて、その患者へ行つてやるのだつた。もしかた、患者が重態だというような時は患者は囲碁の名人を頼んで連れてきておくことを忘れなかつた。すると、負けじ魂の翁はその患者でも夜を徹して、名人と囲碁にひたつた。この二つの戦術は翁を口説き落とすことに何回も成功した。

〔黒船〕第十七巻六号 昭和十七年発行より

西山翁と読書

百日紅や、楠や、紅葉や、松の緑が燃えるように、さんさんと降り注ぐ初夏の陽に照り輝いている。遠く風神を避けて石室丹丘へでも入つたような風趣（ふうしゆ）ある庭である。緑の滴るような樹影のところどころには雪見灯籠などが置いてある。温室の中には幾百鉢という程、翁が愛好、蒐集（しゅうしゅう）した。珍奇な千人掌が覗けている。病後の翁は浴衣がけの軽やかな姿を明るい廊下の安楽椅子にもたせて、ガラス戸越しにじつといま植え込みを眺めていた。その廊下の突き当りが書庫であつた。千人掌を蒐集するというのも、その広汎（こうはん）な趣味のうちの一つであり、千人掌についても、いくたの文献を持つてゐるのだが、

それよりも何よりも翁は驚くべき程の読書家であり、蔵書家だ。

これやもう余程前の話 なんだが、ある保険会社の〇〇という医学博士がはるばる下田へやつてきて、いっぱしの講演会をやつたことがある。その講演はいやしくも博士だということで、賀茂郡の国手という国手はこの講演会には最初から期待をかけていたものだから、おのおのが尊い時間を割愛することにして、会場へ顔を揃えたのである。それくらいだったから、国手連中はいづれもその聴覚という奴を尖らして博士の脳漿（のうしよう）から絞り出されるところの、貴重な「新学説」は片言隻語も聞き逃すまいとしたのに間違ひはなかつた。ところが講演の題目になるとそれは喘息（ぜんそく）とか、狭心症なんていうものに効果があるという「エフェドリン」に就いてというのだつた。得意満面の〇〇博士はさも莊重（そうちよう）な口調で長広告（ちようこうこく）をふるつてしまつたとサツサと下田を引き揚げてしまつた。

この講演があつてから間もなく東賀の医師会長をしている、稲葉英司国手が西山翁を訪ねると、職掌柄〇〇博士の講演が話題にならずにはいなかつた。「ありや昔使つたもので、少しも珍しかあないよ、学校を出た時分見たことがある。それが今日になつて新しく顔を出したまでのものだ。」そう言つて、翁は万巻の書庫に突っ込んであつた、ドイツの薄い原書を引っ張り出してきた。稲葉国手がそれを広げて読んでいくと、それには〇〇博士が熱心に振り回したところの新学説という奴がもつと雄弁にこまごまと載つていたというのである。

このエピソードだけでも翁が読書家であり、蔵書家であることはわかるんだし、専門の医書もそれは数え切れないくらいなのだ

が、殊（こと）に翁がその蒐集に苦心したのは仏教の経典だ。

そうして翁が仏道に心酔、手当たり次第、むさぼるように片端から仏書を蒐集（かいしゅう）、涉獵（しやうりよう）、読破するようになったのは、少年時代から山岡鉄舟に私淑（ししゆく）し、鉄舟に師事して、その愛弟子になつたところから来ていることは言うまでもないんだし、翁に至つては、単なる市井の開業医じゃ

ない、翁は堂々たる宗教家でもあるんだし、古聖賢をも俾ばせるような、翁の君子人的風格も一にその深遠な教養から培われたものだ。するこ

それにしても翁の書巻、蒐集、蔵書癖の旺盛なることはそれが一通りではない。それに、翁が手に入れようとする書巻はどれも、これも高価なものばかりだからね 陋巷（ろうこう）の本屋などにはありっこはない。それだから翁はその一冊を手に入れるにしても、東京や大阪でも代表的な大きい書肆（しよし）へ何軒も注文して置くのだが、それでも翁が注文する書籍は一流の書肆でも容易に手には入らないので、翁のところへはなかなか送っては来ないのである。

だが、そいつが上手い具合にあるとあつちの本屋からも、こちの本屋からも一つの書籍を送ってくることがあるのだが、そういう時には翁は高価なものではあるが、惜しげもなくそれを他に与えてしまうのである。ところが古い仏典などになると、日本の内地では、そうそう手には入らないので、翁はもう我慢が出来なくなつて、半年ばかりかかつて本場の支那までも、買い出しに行つたことがある。こうして翁が数万金をなげうつて、本場の支那から買い込んできた、経典、仏典は、見るからに膨大なものであり、その年代も（別）かつて実によく丹念に系統的に、序列的に穿鑿（せんさく）蒐集した、その冊数はこれだけでも何千冊というのである。その書庫の中に山のようにならず高く積まれた、仏書、経典を翁が血みどろになつて蒐集するのはどんなに永い歳月と、資金をなげうつたかは知れたものではない。

ところでアノ関東大震災という世紀的な、人間の大悲劇は、一朝にして簿書堆裡（ぼしよついい）の我が西山翁に実に悲愴な決意を起こさせたのである。関東の大震災で帝大の図書館が灰燼（かいじん）になると、仏教の経典なども大部分は焼かれてしまった。それを聞くと、持ち前の慈悲心と、母校に寄せる 焼くような赤心は同窓だつた三浦謹之助博士を通じて翁は永年の間にやつとで蒐集した、その経典、仏書も三千二百四十五冊というのを思い切つ

て、帝大の付属図書館へ寄贈してしまつたのである。思いがけなく、翁から寄贈を受けると帝大の古在由直総長と、賞勲局総裁・宇佐美勝夫は相前後して、ねんごろな感謝状を酬（むく）いて来たんだが、言わば翁の分身とでもいうべき、それだけの蔵書を未練もなく寄贈したというのは尋常人にはちよつと窺（うかが）えないことだ。だから、帝大の図書館に設けられた翁をもつて呼んでいるところの、輝く「西山文庫」はいまだに、仏教を部門とする学徒を限りなく感激させているのである。

帝大へそんなに寄贈したのだが、周りがガラス戸棚になつた、翁の書庫にまだまだドイツの医学原書を初めとして、名所図会やら、シーボルト江戸参府紀行やら、文学、美術、宗教など書巻がギツシリ詰まつている、中に沼田頼輔の「日本紋章学」なんていうものまでが、その書架を飾つている。んだし、読書といつてもその及ぶところの範囲の広汎（こうはん）なものにはおどろかされるくらいなのだが、それもことごとくが巻いたり広げたりしてあるのだから、「読書万巻」の文字は、それは翁にして初めて通用する言葉だ。一体胸次に読書のない人生ぐらい淋しいものはない。んだが、刀圭家にしても翁の如「人生唯読書の好き有り」の真趣味を理解し、素稔しているというのはまったくそれは珍しい。

〔黒船〕第十七巻七号 昭和十七年発行より

【語句】 巨震／単身

伶俐／かしこいこと

利口・悍馬／性質のあらあらしい馬

蒐集／収集

風趣／忍び寄る秋の一、莊重／おこそかで重々しい

私淑／ひそかにわが身をよくと。

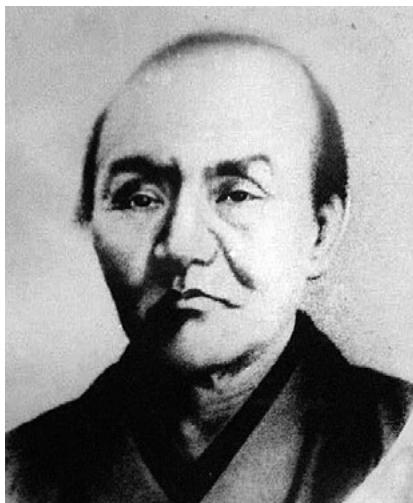
砂広うして孤松秀づ（砂広孤松秀）空しく留む壮士（そうし）の名（空留壮士名）水禽何の恨む所ぞ（水禽何所恨）飛んで夕陽に向かつて鳴く（飛向夕陽鳴）

山岡鉄舟が壮士を傷む詩賦（しふ）だ。榎本武揚を総裁とする、咸臨丸へ乗り込んでいた、壮士の死骸は、青い海の面を真つ赤に染めて、漁師さえも漁に出ることを避けた、後難を怖れて誰も手をつける者がなかったからである。誰一人手をさしのべる者は無かつたんだが、そこへいくと清水の次郎長ばかりは、人間が最期のこの惨（みじめ）たらしい現実はうっちゃやつておけなかつた。

次郎長の仁義は誰も容赦はなく、幕軍壮士の遺骸を収容して清水港へ注ぐ巴川河畔へ埋葬してやったのである。ところが相手が官軍なのだからどんなことがおきないともかぎらないというので、子分たちは、内心親分の身辺を気遣つたのだが、次郎長はもとより平気だつた。だが次郎長はアトで果たして、ちよつと来いて食らつたものだから、気早の子分はドスをぶちこんで駆け出すという騒ぎ、おまけに相手は名なし負う明治維新に立役者の鉄舟だつたのだが、次郎長は少しも悪びれはしなかつた。

「お前は勝手にそんなことをして、もしお尋ねがあつた時はどう言い開きをするか。」

「官軍だ、賊軍だといつてみましたところで、それやお互いに生きている間のこと、わしの考えじゃ死んでしまやあ、みんな一つの仏様、それにああして何時までも打つちやつて置いたじゃ。第一漁師だつて渡世は出来や



▲清水次郎長

しません。「よしわかつた、わしはお前が官軍から尋ねられたときに、どういふ弁解をするかと思つて、それを案じてお前を呼んで聞いてみたのだが、そういう答弁なら安心した。さあもつと近く寄つて飲むがえい。」

こうした鉄舟の高大な人間愛には次郎長もひとりでに頭が下がつた。さされるままに杯を重ねた次郎長はすっかり良い気になつてしまつて、碑名まで頼むと、鉄舟がすぐさまえらんでくれたのが、今に残る次郎長遺跡のアノ「壮士の墓」なんであり、その時鉄舟が詠んでくれたのがあつた余韻嫋々（よいんじょうじょう）の五言絶句。鉄舟の人間愛はその仁侠（にんきやう）を買つて當時街道に鳴つていた。男一匹の次郎長に侠名を廃れさせたくなかつたのである。こうして鉄舟が人間を愛したように鉄舟の愛弟子だつたところの我が西山翁も青年に対してはいまだに愛着はすてない。

医は仁術の医道生活五十年を貫いた、翁は元来が学者であり、宗教家なんだが、それでいて下世話に碎けた、まだ元氣満腹だつた時分の翁は、毎月三四回位は稲取の青年を多勢その邸第へ招んで、翁もまた自身が堂々師匠になつて青年が無邪気に歌謡曲を唄つたり、踊つたり、跳ねたりするのを見て、楽しみにしてつたものだ。

神楽の舞に使う道具などは翁が田方の八幡野あたりで買い込んで、それを翁自身がそこから背負つて来たもので、これはいまでも田町区に保存してある。囃子方の師匠は翁が幾度となくわざわざ関西西方から呼んで青年に稽古をつけさせたのだから、笛でも、鼓でも、三弦でも、その謡の謡い方にしても、その通りの手さばきにしても、しつくりと板についていた。

稲取には毎年盂蘭盆（うらぼんえ）に執行する八幡神社の祭典があつて、その祭典には青年は衣装を揃えるんだが、翁はそれとは別に、桃色の斑点のついた手ぬぐいなぞも染めさせてもたせた。それだから、八幡神社の祭典がどんなに雑踏をしたつても、その手ぬぐいでもつて、それが西山邸のグループの青年たちであることはすぐにわかつた。その夜の西山邸は笛が鳴る、鼓が響く、弦が流れるで、さながらお祭りが駆け込んだように、こんもりした

杜に包まれた邸内は、紅い提灯がその樹影に覗けもして、いとも華やかな、明るい雰囲気に包まれるのだった。それが毎月何遍という程繰り返されたんだから、当時の稲取青年は解放的なその「歡樂の夕べ」を心からどんなに感謝していたか知れない。こうした享樂の対象を持った当時の稲取青年がおのおの職業に忠実であり、勤勉だったことはそれはいうまでもない。

青年は働き甲斐があると思つた、青年の体には力がうなつていた。六、七千の人口を有する稲取には不幸な境遇に置かれた老人も少なくなかった。それだものだから、そうして時々青年を呼んで慰安を与えてやつた翁の満足感は今度は青年と同じように老人輩をよんでやることにしたのである。ところが老人輩になると、始まりは行儀がいいんだが、生理的に機能が消耗してしまつているので、やがて馳走が出て、無礼講になると、それぞれ若い時分に覚えこんだ、隠し芸が飛び出して唄つたり、跳ねたりは結構なのだが酔いが回つてくると、忽(たちま)ち分別を失つてしまつて、処もかまわずに不淨な物を出したり、中には若衆のような元気に返つて、掴み合いをオツ始める者もあるというふうなので、これにはさすがの翁もすっかり辟易(へきえき)してしまつた。それ限り、老人輩は招かないことにしたのだが、青年たちはそれから翁の邸内へ出入りすることを許されていた。どこまでも学者肌で寡言(かげん)ではあり、その風格も秋霜烈日(しゅうりつ)うれつじつ)を思わせる翁ではあるが、それでいて芸事なぞも青年たちのリーダーであり、青年たちと一緒に唄つたり、踊つたりもして、さんざ稽古の積んでいる翁は、どういふ宴会であつても、断じて引け目は感じるものではない。明治時代の模範村、稲取を今日に築き上げた功績は、田村又吉翁と、我が西山翁、それに田村翁と同様いまは亡くなつてゐる稲取小学校校長だつた太田米吉のこの三人者に帰すべきものであり、稲取は元來が漁業經濟圏なんだが、祖先以來の若衆氣質という奴がいまだに尊重されてゐる、「芸者禁制」の稲取に、青年のそうした美風良俗が今日に

残されているといふのも翁の感化薰染(かんかくんせん)に負う所が少なくない。真面目で、純朴な稲取青年のために邸内を開放して、極樂機關を作つてやつたり、貧困者に無料で施療(せりよう)してやることを惜しまなかつた人間・西山翁には稲取町と濟世窮民(さいせいきゆうみん)と以外には何物もなかつた。

正直、翁には幾人かの愛児があるのだが、武士は食わねど高楊枝式の翁は、初めは愛児の學費なんていうものもてんで考へには置かなかつた。翁の英雄相はやつぱり鉄舟親爺からも来ている。

(「黒船」第十七卷八号 昭和十七年発行より)

【語包】秋霜烈日／刑罰、威勢、節操などのきびしいたとえ。
施療／無料で人の病氣を治療すること。



栄昌院時代（杏春堂医院）

「杏林／医者之美称。三国時代、呉の董奉が治療代を取ら軽症者にないで、重病者には五本、軽病者には一本の杏をうえさせたことから。」

天城山系の裾に広がる小さな盆地。いまでは花壇などが作つてある。本堂の前は三百坪ばかりが平地になつていて、そこには六地藏尊が祀つてある。石段を上がると、本堂へ導く舗道を挟んで、椿の老木と、棕櫚（しゅろ）が行儀よく背くらべをしている。屋根を瓦で葺いた、伽藍（がらん）は本堂にしても、庫裡（くり）にしても、こんな山中の寒寺とは思えない、こざっぱりした造り。我が西山翁が医は仁術生活のスタートをした、稲取の入谷にある栄昌院だ。

翁の人生医業道中記はここから始まつているんだし、それと翁に内助の功が多かつた、聡明な夫人を迎えたのも、この栄昌院時代なのだし、母屋を失つたのもその時分ではあり、栄昌院は西山家の菩提寺にもなつているのだから、栄昌院と翁の関係は、それや寧（むし）ろ宿命的だ。あの本堂の前にある、椿の老木も、棕櫚



▲栄昌院 椿の老木

も翁が栄昌院時代に植えたものであり、寺門の石段の側にあつた、槇の巨木も翁が移植したものだ、これは途中で枯れたものだから、今の保田松堂住職が本堂の椽（たるき）にこしらえてある。

栄昌院では翁は本堂の廊下の一部を内科室にしてた。そこから鍵の手になつた庫裡へ続いた廊下は外科室だつた。書生は三人使つていたが、何しても明治も初期の帝大出ではあり、賀茂は勿論、静岡県を通じて翁はその時分の国手としては最新知識だつたのだから、翁が名づくるところの杏春堂医院へは郡内はおろか、伊豆七島あたりからもひつきりなしに患者が診療に来たものである。従つて三餐（さんさん）を執る暇もなかつたくらいなのだが、それでも運動家の翁は診察が済んでしまうと、ガッチリとした、堂々二十幾貫かの巨軀を庭へ運んですぐに運動をおつ始めた。

師匠の山岡鉄舟はまだ江戸の幕府に仕えていた時分、よく江戸から三島へやつて来て龍沢寺（りょうたくじ）の星定（せいじょう）老師について禅修業を積んだんだが、箱根八里は振り分け荷物で道中をした時分のことだから、探僧（けつそう）星定の風格を慕つて、江戸からはるばる三島の龍沢寺へ参禅にやつて来るのにも、鉄舟はよくもまあ、あの函嶺（かんれい）、箱根八里を馬の背にして、この間を平気で通つたものだ。だから、我が西山翁も鉄舟とご同様天下の名騎手だつたことは、前にもちよつと書いても置いたように、それも翁は性質が荒つぽくて普通の者の手にはおえないような悍馬（かんば）に太い鞭を当てて、思い様駆けさせたのだから、翁のその騎馬往診に至つてはさながら、それは古武士のような颯爽たる面影、風格を偲ばせたものだが、その代わり一度翁に乗り回されるとどんな悍馬でも、その後ではすっかり勢力が消耗をしてぐつたりとしまつた。

鉄舟が天下無敵の劍客だつたように、劍道も好きだつた、杏春堂医院がまだ栄昌院時代の翁は一頃はよく本堂で居合術という奴もやつたことがある。それは刃身が三尺もあるというのに膂力（りよりよく）の優れた翁はその長刃を「エイヤ」の掛け声で巧みに幾度でも抜き放つて見せたものだが、切れ味も素晴しかったこ

の刀剣は危険だというので後に翁の家兄が、刃をすりおろしてしまつたが、この名剣は今も翁が秘蔵している。

石段を刻んだ寺門は道路より是一段高くなつていて、その横手、今は畑になつてゐるが、そこには角力(すもう)の土俵場が出来てゐた。満身の力がはち切れそうだった、その頃の翁は入谷の若衆や、書生を相手にして、その土俵場で四股を踏んだものだが、角力は本堂でも取つた、そういう男性的な運動は晩年に近い頃までも続いた。

長い間、鉄舟のところに行った翁の母堂(ぼどう)は、翁がそこで開業すると、間もなく栄昌院へ来ていた。それからの母堂は、ずっと翁と一緒にいたのだが、仏門に帰依して読破万巻(どくはまんがん)、さすがに幽玄な人生哲学をつかんでいたにしたところで、翁が栄昌院時代に悲哀をとどめたのは、何といつても、それは若い時分に良人を失い、それからずっと孤独を続けて来た母堂を亡くしたということだ。

ものいはね 草木ととも(共)の山住は

ただ吹く風に 身を委せつつ

歌人でもあり、典型的な日本女性だった翁の母堂が詠んだ、辞世の歌である。

稲取の学校のところから緩傾斜道(かんけいしゃどう)を五、六町も上つたかと思うと、尾根に松の植わつた愛宕山がある。そこから凡そ二、三町、愛宕山の背後が栄昌院なのだが、ここはもう四面還山(しめんかんざん)で夜が明ければ鶯(うぐいす)が鳴く、鳩が鳴く、若葉の時分になると杜鵑(ほととぎす)が鳴きながら空を翔(かけ)る、鴨(ひよどり)が鳴いている、梟(ふくろう)も聞かれる、翁の母堂が詠んだ、この国風詩には永い間、鉄舟と共に禅門にいただけに、そういう自然と融けあつて、水のように淡い、静寂枯淡(せいじやくこたん)な生活に満足して、その晩年をここで送つていたということが、まざまざと歌詞ににじみ出

ている。

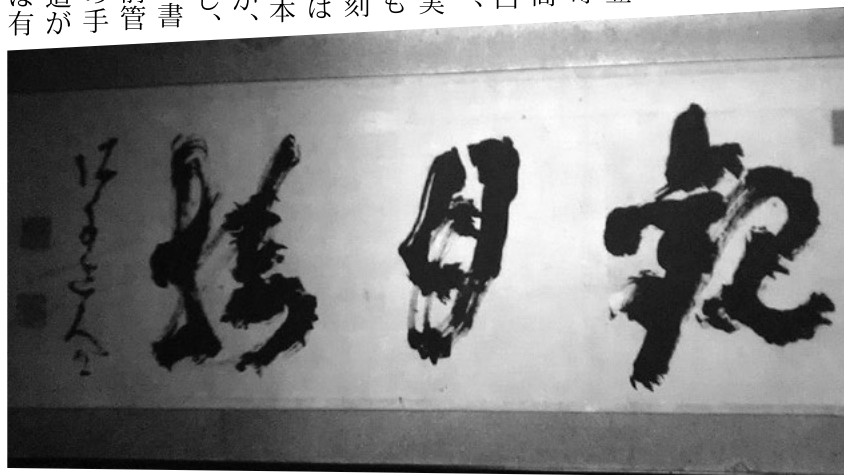
庫裡の背後には梶田半古の水墨を見るような枝振りのよい老松がある。西山翁も母堂も朝夕にその颯々(さつそう)たる松籟(しようらい)に耳を傾けたことであろう。無数の碑石の中にある、蕙などが絡まつてゐる、周囲が一丈五六尺もある、この巨松には臨濟宗の宗旨が、石塔の代わりに松を植えるというので、栄昌院の開山、鍊叔宗金和尚が四百年前に植えたものだという伝説がある。

この老松から少し隔(へ)たつた上のほうに田村又吉翁、それと並んで一段高いところ

に西山家累代(るいだい)の墓所がある。「貞誠院氷心晩節大姉」というのが母堂の法名であり、そのうちで「貞誠院」の三字は、静岡から伊豆へ来た翁が初めに身を寄せていた、下河津村見高

にある真乗寺の住職、白応和尚が選んだものだが、「氷心晩節」の四文字は実に山岡鉄舟が命名したものであり、石碑の横に刻んである、母堂の辞世は翁が交流のあつた、日本

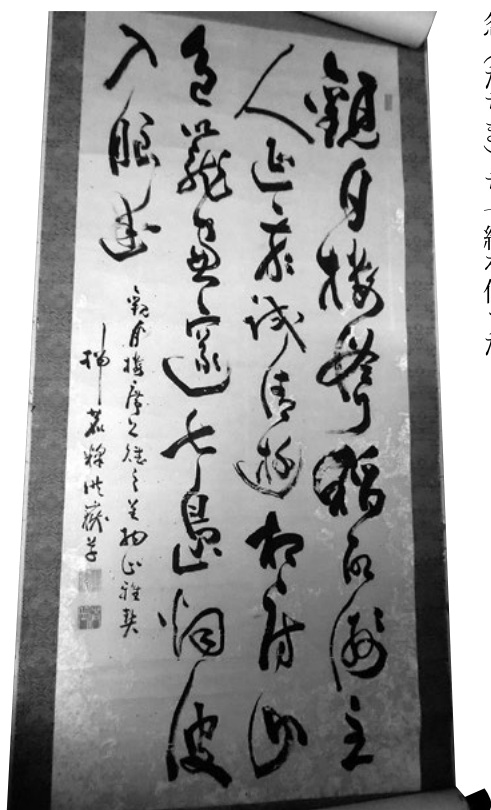
三舟の一人、高橋泥舟が、毫も揮(ふる)つたのだし、「貞誠院心晩節大姉」の書は相州鎌倉、建長寺の前管長霄(おおぞら)貫道の手になつたものだ。霄貫道が書道に長けていたことは有



▲高橋泥舟の書

名なものだったが、泥舟もまさしくそれはたち筆だ。その名も観月楼(かんげつろう)と呼ぶ西山翁の十畳の居間に懸かっている「観月楼」字額も泥舟が書いたものだが、これなどもよく枯淡(こたん)な筆致(ひつち)で書かれている。

観月楼といえば、大本山覺寺の管長として明治時代に、海内(かいだい)に響いた釈宗演も翁を訪ねて来て、そこで清夜をすごしたことがある。釈宗演(しゃくむねん)がこんな僻隅(へきすみ)などところへ乗り出して来たというのは、西山翁が山岡鉄舟の愛弟子でもあった関係上、高橋泥舟のような天下知名の士と交遊、殊(こと)に仏門ではあらゆる名家と往復していたからであることは言うまでもない。観月楼で秋の清夜を翁と語り合っているうちに、感興(かんきよう)が乗ってくると宗演は豊富な诗情にまかせて忽(たちま)ち七絶を作った。



親月樓翁福取洲(親月樓翁(そび)ゆ、稻取の洲)
 主人延我試清遊(主人我を延いて清遊を試む)
 相房山色籠窓遠(相房の山色、窓邃に籠もり)
 七島烟波入眼幽(七島の烟波(えんば)、眼に入りて幽なり)

翁の居室からは釈宗演が、この即興詩で詠んだように、紫色の影を引いた、相房や、伊豆七島の山光水色がはつきりと見晴らせる。それだものだから、翁は勿論、翁の夫人も、「これやいとこらだなあ、紙を出しなさい。」と言って釈宗演がかいてくれたというんで非常に喜んだのに違いはない。翁が無償で提供したものだから、そのまま使っている稲取診療所は院長が詩文などもよくする市川華舟で、「ジスをおかけになって固定すれば疼痛はなくなりますから、そうなさい。」と言えば、翁は観月楼の次の間を病室にして静かに体をベットに横たえているのだが、左足のひざ関節のところ、今も、やけにうずくというので、「ジスをかけたじゃ、体が不自由になる。いつそ斬つてしまおうかなあ。」と言ってカラカラと笑った。どこまでも武士気質を失わない翁の剛肚さはこれでもわかる。

〔黒船〕第十七巻九号 昭和十七年発行より

西山翁と田村翁

翁と交遊のあった高橋泥舟は、下田へも筆を載せて揮毫(きごう)に来たことがある。その時の下田原町の客舎は、相当に繁昌(はんしょう)をしたんだが、泥舟は泥舟一流の例の雄勁(ゆうけい)な筆法でもって毫(ふで)を揮(ふる)つてしまうと、鑑賞(かんしょう)でもするように、じつとそいつを見やりながら「槍をもたせちや俺は天下第一(だいいち)なんだがなあ。」と言った。これや一面泥舟が書道に至ってはまだまだ自分が天下の槍の名人程にないということを告白したようなものなのであり、書道になると、槍の名人であるようにはいかに、それは泥舟も寧(むし)る謙讓(けんじょう)の態度を執っていたのだが、前に書いた翁の母堂の碑唱(ひかつ)に刻んである、辞世の歌の筆致(ひつち)にしたところで、その運筆(うんぴつ)



▲高橋泥舟

んびつ)の自在にして奔放なる、泥舟もまた堂々たる書家であることをそれは首肯(しゅこう)せしめる。ところが書家としては西山翁は泥舟には行かなかった。

書道では翁は寧ろ縁戚にあつた山岡鉄舟の書風、筆跡を愛好した。鉄舟は清水に伊太時分、鉄舟寺を再建する資金を作るために、紙に落とせば、さながら雲煙のような雄渾(ゆうこん)な筆致でもって、いくつでも毫を揮った。西山翁はその側で、色紙を展(の)べたり、墨を摺ったりした。それだもんだから翁の書風は鉄舟の感化、影響を受けないわけにはいかなかった。それが音楽にまでもおよんでいる翁の趣味性は元来が多角的なんだが翁は書道というものに対して、この時程趣味を感じたことはなかった。翁が書家としての素地はこの時分に作られたのだといつてもよい。だから典麗(てんれい)な翁の筆致には、そのどこかに鉄舟の書風を伺うことが出来る。



▲山岡鉄舟の書

稲取港の人たちはよくそれを知っていて翁がまだたち者だった時分は、建造船があると、たびたびその建造船の船名を翁に書いてもらったものだ。そういう時には、翁も快くそれを聞いてやった。明治時代の模範村稲取建設者の一人、田村又吉翁の墓所が西山家の墓所と並んでいることは前に書いた。その「田村又吉の墓」と「至誠院報本宗徳大門居士」の法名は西山翁の手蹟(しゅせき)になるものであり、華麗なその書風には、光風霽月式な、からりとした翁の性格、魂が生き生きとよく躍っている。

翁が南豆の棋客(きかく)であるあることも前に言ったが、小泉三申が西林寺の住職を相手に、小浦の浄行院でもって夜つぴといでも打ち続けたように、我が西山翁といえども、それがころあいの敵手と見ると夜明かしぐらいはなんでもない、そういう格好な敵手にぶつかると、翁は三餐(さんさん)をつ執ることも、何もかもすつかり遺却(いきやく)してしまうんだから、相手は大抵(たいてい)かぶとを脱いでしまふ。

「先生、最終のバスでお暇を頂きます。」

西山邸へ出入りしていた、下田の表具屋はそう言って逃げ支度にかかったんだが、翁はその表具屋を捕虜にした限り、何時になつても放さない。表具屋の帰心は勝敗などはどうでもいいのだが、幾度打ち返しても飽くことを知らない翁だ。

「道具は預かつておく」

表具屋はどこかへ隠されてしまった商売道具にも未練はなかった。表具屋はもう気が気でなかった。時計を見ると最終のバスにはもう間がないんで、そつとその部屋を抜け出して黙って帰ろうとすると、それと感づいた翁は一散に長い廊下へ飛び出し、童児(どうじ)なんぞのように、表具屋を背後から抱きこんで、その居間の観月楼へ引きずりこんでしまった。

「先生、負けました。」

表具屋も腹は立たなかった。以後の三味境に浸りこんでいる時の翁である。観月楼の障子には、徹宵(てっしょう)二人きりの影法師が映し出されていた。二人はこの時も二日間打ち通し碁を続けた。

六段になって亡くなった、斎藤謙徳も四段時分の頃は毎年一度はかならずやってきて翁に稽古をつけた。翁は仏書の買出しに、支那へ行つた時も謙徳を連れて行つた。この時の支那漫遊は囲碁安脚と言つてもいいくらい翁は囲碁を熱愛した。東京の帝大を出ると鉄舟の添え書きを持って尋ねた関口県令が、あいにく車輛にかかつて非業の最期を遂げると、翁は一度下田へも来たことがあつた。だがその頃は学徒としても、赤門出は十指にも足らないくら

いだつたから、下田でさえもまだ翁を抱擁するだけの雅量（がりょう）はなかった。ところが稲取は田村又吉翁が村長の時分、明治も十四、五年頃は疫癘（えきれい）が流行して、たくさんの犠牲者がでた。それがチフスクらいならまだしもなんだが、そのうちにコレラの流行時代さえやって来て、村民を不安と恐怖のドン低へ叩き込んだのである。そこで七名の委員が出来て、西山翁に交渉すると翁も言下（ごんか）に快諾したのだが適当な建物もなかったものだから、翁は入谷の栄昌院で開業することにしたのである。

それが明治二十二年、その頃はベストという奴が流行したものだから、翁は済生学舎出の斎藤周平などと一緒に、当時は日本医学の最高權威とされていた北里柴三郎の研究所へも三、四回ばかり通つて研究を重ねた。

それからこつちへおよそ五十年、悪疫が流行した時分の翁は一日に八回も栄昌院から山を上下したというのだから、その全生涯を医は仁術生活に傾倒、稲取を病魔の淵から救出した翁の功績は元より伝えるべきなんだが、翁はいまだに放浪時代に稲取へ招聘された時分のことを忘れやしない。

元来友義、友情に敦厚（とんこう）な翁の交態は何時になつても変わりはない。それだものだから帝大時分に同級だった三浦謙之助や、元鉄相の小川射山なんかも翁の観月楼へは時々やって来て、朝夕に移り変わる伊豆七島や房相の景観をむさぼりながら、酒を煮てよく旧情を温めたものだ。

「これや 小川が書いたものです。」

小川射山が獄中で書いたその随筆集を筆者に見せた、友道に篤い翁の胸にはいまも旧知に対する恩慕（おんぼ）の情がこみ上げて来たらしかった。そういうふうだから、翁は放浪時代の自分を稲取へ招聘してくれた当時の委員とは今日でも縁戚のような交情を続けている。殊に栄昌院から入谷山道に出ると、田村又吉翁の家は一段高くその山道の左側にあるので、翁と田村翁とはほか一倍親密にしていた。

身命を賭けて悪疫退治に奔走した田村翁はしまいにはとうとう

自分までがそれに感染してしまった。田村翁はその病原、伝染の経路がどこから来ているかということを探求しなければならぬと思つた。それから穿鑿（せんさく）の歩を進めていくと腸チフスは井戸水に原因したことがわかった。浜部落の井戸水を飲むと部落民はきまつて、腸チフスにかかった。腸チフスの発生する原因が井戸水であることがわかると、田村翁は簡易水道の布設を考へた。そこで、海岸の浜部落通じた幹線、延長七百間へ杉皮の木管を埋没、稲取へ初めて水道を架設したのだが、この水道布設にしても、もとは西山翁の徳（しょうよう）に出たものだ。

翁はもと武家の産だが、田村翁は入谷の山中から出ているのだから、この二人は初めつからその環境が違つているんだが、それでいて二人の性格には一脈、相つうじたところがある。

と言うのは 田村翁はただ一個、田叟（でんそう）野人でなしに碑名にもそれが刻んであるように、尊徳の二宮翁を信奉（しんぽう）、それでもつて稲取に地上の楽園を建設しようとしたからであり、西山翁は医は仁術主義でそれを実現しようとしたんだし、この二人が濟世救民を志したというのに至つては、共にその軌（みち）を一にしたからだ。だから田村翁は西山翁とはわけてもはげしく往来をした。西山翁も田村翁のところへはたびたび出かけていって、模範村稲取の建設を語り合つた。そういうふうだったから、翁は、田村家ともいまだに肉親と同じような、親しい交際を続けている。

（黒船）第十七卷十号昭和十七年発行より



▲開院当時の看護婦



▲昭和 15 年 4 月町立病院開院



▲西山五郎先生の往診はクルマよりも馬の方が多かった



▲支那で購入して持ち帰った瓶

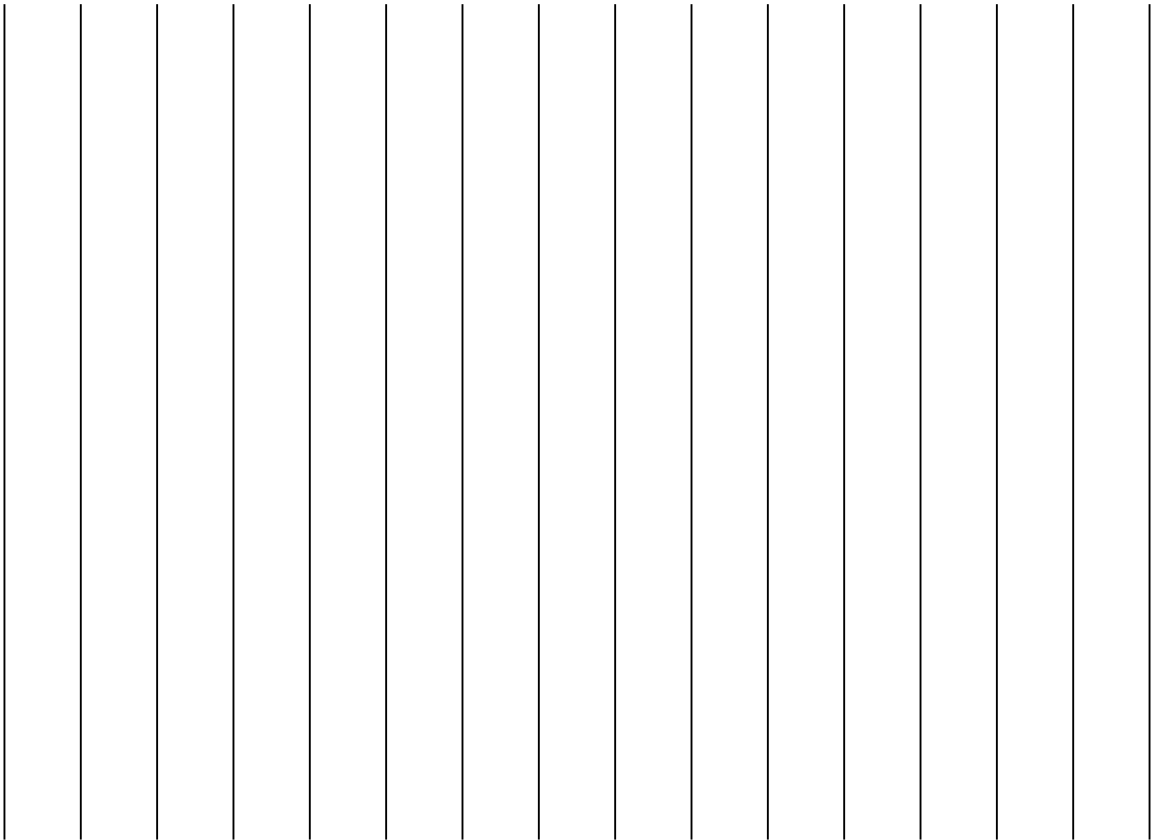
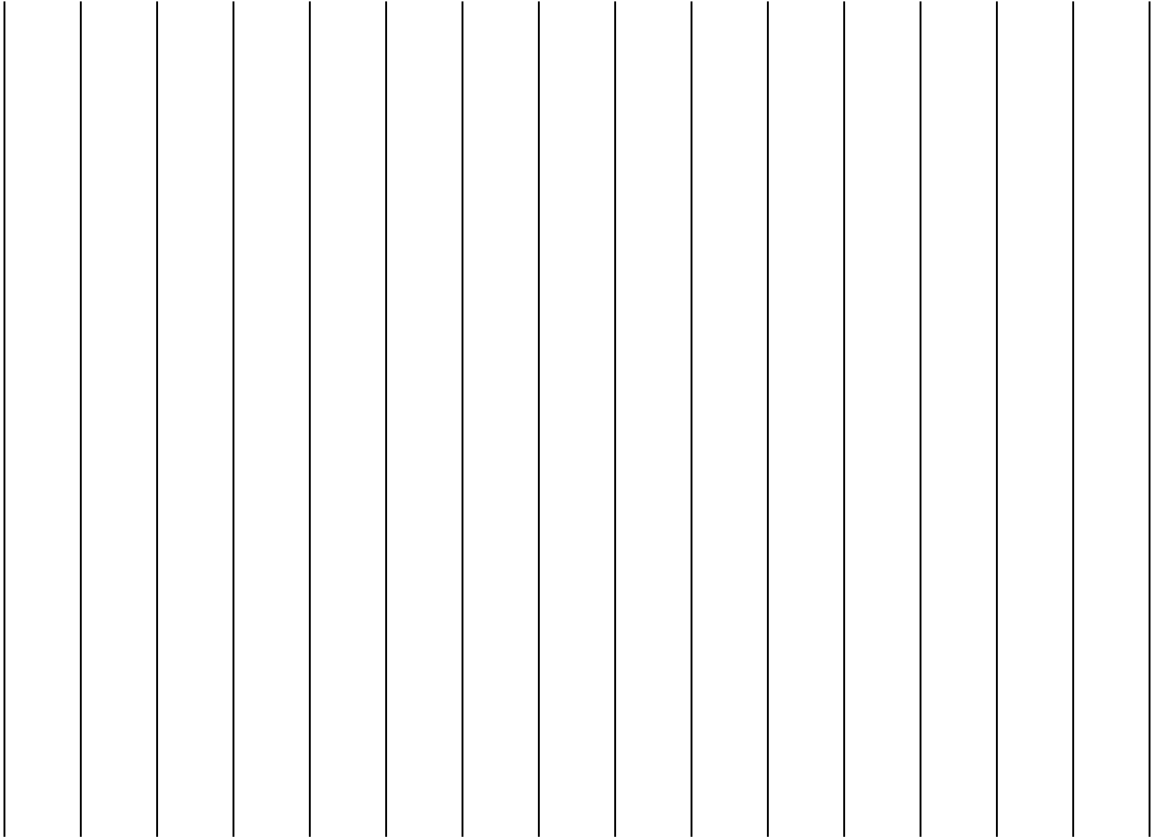


▲近年、西山家の蔵から発見された勝海舟の書



▲西山家

覺之書



西山五郎と 稲取

子供たちの健康と町を
悪疫から守った
最高学府出身の医学士

.....
東伊豆 ECO ツーリズム協議会